

拳、振りかざす
齋藤 貢

好きこのんで、誰がここに立つというのだろうか。どこにも、逃げ場のないところ。危険きわまりないところ。

拳、振りかざし

叩きのめしたいものがありながら拳は、何度も空を切っている。

そこに、立って。立たされて。無力なままに、立たされて。

あの日から

突然に訪れた暴力の洪水に抗しようもなく、のみこまれた。

たとえ悲鳴が聞こえていても

何ができただろうか。もろくて小さな塵埃には

差し出す腕もなかったから

あの日。嗚咽は、やまず

皮膚は瓦礫に擦れ空には血も滲んでいただろう。

狭いリングの上で

両腕をだらりと垂らしたまま

けだもののように

あの日を、にらみつけるしかない。

手招きで挑発しても

歳月は、ただ黙っているだけ。

敵は、うすら笑っているだけ。

ぶざまだろうが、惨めだろうがこのままでは終われない。

何もかも

あの日のすべてを、ぶち壊してしまいたい。

壊さなければ、終わらないから

くちびるが裂けるまで

まぶたが腫れあがって、たとえ見えなくなっても

拳、振りかざす。

張り倒したい昨日がある。

ぶちのめしたい奴がいる。

もはや

グローブは、必要ないだろうね。

素手で、壊さなければ

叩きのめさなければ

熱い血の滴る日々には戻れない。

それから、だろうか。

生臭い息で、ひとの言葉が語られるのは。